

日蓮大聖人御書全集

ふなもりやさぶろうもとごしよ

船守弥三郎許御書

新版
1722
ゝ
1724

ふなもりやさぶろうもとごしよ

船守弥三郎許御書

こうちようがんねん

がつ にち

さい

ふなもりやさぶろう

弘長元年('61)

6月27日

40歳

船守弥三郎

つか

粽

酒

干

飯

山

椒

わざと使いをもつて、ちまき・さけ・ほしい・さんしよう・

紙

品

々

た

そうら

お

かみ、しなじな給び候い畢わんぬ。

使

もう

そうらう

おん

隠

たま

もう

あ

そうら

またつかい申され候は「御かくさせ給えと申し上げ候

にちれん

こころえもう

そうらう

え」と。日蓮、心得申すべく候。

にちれん

い

ごがつじゅうにち

るさい

とき

つ

着

そうら

日蓮、去ぬる五月十二日、流罪の時、その津につきて候

な

聞

及

そうらう

いしに、いまだ名をもききおよびまいらせず候ところ、

ふね

上

苦

そうら

懇

当

船よりあがりくるしみ候いきところに、ねんごろにあたら

たま そら

しゆくじゆう

かこ

せ給い候いしことはいかなる宿習なるらん。過去に

ほけきよう ぎようじや

たま

いま まつぼう

船 守

法華經の行者にてわたらせ給えるが、今、末法にふなもり

やさぶろう

う

変

にちれん

哀

たも

の弥三郎と生まれかわりて、日蓮をあわれみ給うか。たと

なん

にようぼう

み

じき

与

い男はさもあるべきに、女房の身として食をあたえ、

せんぞく

手

水

ほか

こと

にちれん

洗足・ちようず、その外、さも事ねんごろなること、日蓮は

知

ふしぎ

もう

さんじゆうにち

余

しらず、不思議とも申すばかりなし。ことに三十日あまり

ないしん

ほけきよう

しん

にちれん

くよう

たも

ありて、内心に法華經を信じ、日蓮を供養し給うこと、い

いこ

由

かなる事のよしなるや。

じとう

ばんみん

にちれん

憎

妬

かまくら

かかる、地頭・万民、日蓮をにくみねたむこと、鎌倉よ

過

見

者

め

引

聞

ひと

怨

りもすぎたり。みるものは目をひき、きく人はあだむ。こ

さつき

頃

こめ

乏

にちれん

ないない

とに五月のころなれば米もとぼしかるらん、日蓮を内々

育

たま

にちれん

ふぼ

いず

いとう

にてはぐくみ給いしことは、日蓮が父母の伊豆の伊東・

川 奈

所

う

変

たも

ほけきよう

だいし

かわなというところに生まれかわり給うか。法華經の第四

い

しょうしんじによ

ほつし

くよう

うんぬん

に云わく「および清信士女をして、法師を供養せしむ」云々。

ほけきよう

ぎよう

もの

しよてんぜんじんとう

男

法華經を行ぜん者をば、諸天善神等、あるいはおとことな

おんな

かたち

変

くよう

り、あるいは女となり、形をかえ、さまざまに供養して

助

きようもん

やさぶろうどのふうふ

しによ

う

たすくべしという經文なり。弥三郎殿夫婦の「士女」と生

にちれんほつし

くよう

うたが

前

進

まれて、日蓮法師を供養すること疑いなし。さきにまいら

ふみ

書

そうら

いま

詳

せし文につぶさにかきて候いしあいだ、今はくわしからず。

とうじとう

びようのう

き 請 もう

由 おお

ことに当地頭の病悩について祈せい申すべきよし仰せ

そうら

あん

扱

そうろう

いちぶんしんこう

候いしあいだ、案にあつかいて候。しかれども、一分信仰

こころ

にちれん

い

たま

ほけきよう

訴

訟

思

の心を日蓮に出だし給えば、法華経へそしようとこそおも

そうら

とき

じゆうらせつによ

ちから

合

たま

い候え。この時は、十羅刹女もいかでか力をあわせ給わ

おも

そうら

ほけきよう

しやか

たほう

じつぽう

しよぶつ

ざるべきと思ひ候いて、法華経・釈迦・多宝・十方の諸仏

てんしょう

はちまん

だいしょう

じんぎとう

もう

そうろう

さだ

ならびに天照・八幡・大小の神祇等に申して候。定め

ひようぎ

験

顕

たま

にちれん

て評議ありてぞしるしをばあらわし給わん、よも日蓮をば

す

たま

痛

痒

充

たま

捨てさせ給わじ、いたきとかゆきとのごとくあてがわせ給

思　　そうら

びようのう　治

かいちゆう

わんとおもい候いしに、ついに病悩なおり、海中、

鱗

なか

しゅつげん

ぶつたい

にちれん

賜

いろくずの中より出現の仏体を日蓮にたまわること、これ

びようのう

じゅうらせつによ

責

くどく

病悩のゆえなり。さだめて十羅刹女のせめなり。この功德

ふうふににん

くどく

も、夫婦二人の功德となるべし。

われ

しゅじよう

むし

しょうじかい

なか

我ら衆生、無始よりこのかた生死海の中にありしが、

ほけきよう

ぎようじゃ

むししきしん

ほんぜりしよう

みようきようみようち

法華經の行者となりて、「無始色心、本是理性、妙境妙智

むし

しきしん

もと

りしよう

みようきよう

みようち

（無始の色心は、本よりこれ理性にして、妙境・妙智な

こんごうふめつ

ぶつしん

彼

ほとけ

替

り）の金剛不滅の仏身とならんこと、あにかの仏にかわ

かこくおんごひやくじんてん

ゆいがいちにん

きようしゅ

るべきや。過去久遠五百塵点のそのかみ「唯我一人」の教主

しやくそん

われ しゅじよう

ほけきよう

いちねんさんぜん

ほうもん

釈尊とは、我ら衆生のことなり。法華經の一念三千の法門、

じようじゆうし せつぽう

振 舞

尊

ほけきよう

「常住此説法」のふるまいなり。かかるとうとき法華經と

しやくそん

ぼんぷ

知

じゆりようほん

い

釈尊にておわせども、凡夫はしることなし。寿量品に云わ

てんどう

しゅじよう

ちか

み

く「顛倒の衆生をして、近しといえども見ざらしむ」とは、

めいご

ふどう

しやら

しけん

いちねんさんぜん

これなり。迷悟の不同は沙羅の四見のごとし。一念三千の

ほとけ

もう

ほうかい

じようぶつ

そうろう

仏と申すは、法界の成仏ということにて候ぞ。

せつせんどうじ

前

来

きじん

たいしやく

へんさ

雪山童子のまえにきたりし鬼神は、帝釈の変作なり。

し び おう

ところ

逃

い

はと

びしゆかつまてん

はんそくおう

尸毘王の所へにげ入りし鳩は、毘首羯摩天ぞかし。班足王

しろ

い

ふみようおう

きようしゅしやくそん

にくげん

知

の城へ入りし普明王は、教主釈尊にてまします。肉眼はし

ぶつげん

見

こくう

たいかい

ぎよちよう

ひぎよう

らず、仏眼はこれをみる。虚空と大海とには魚鳥の飛行す

跡

きようもん

見

もくぞうそくこんじき

るあとあり。これらは経文にみえたり。木像即金色なり、

こんじきそくもくぞう

阿又棲駄

こがね

兎

しびと

金色即木像なり。あぬるだが金は、うさぎとなり、死人と

しやくまなん

掌

砂

こがね

なる。釈摩男がたなごころには、いさごも金となる。これ

しぎ

ぼんぷそくほとけ

ほとけそくぼんぷ

いちねん

らは思議すべからず。凡夫即仏なり、仏即凡夫なり。一念

さんぜん

がじつじようぶつ

三千・我実成仏これなり。

ふうふににん

きようしゆ

だいかくせそん

う

変

しからば、夫婦二人は、教主・大覚世尊の生まれかわり

たま

にちれん

助

たも

いとう

川

奈

道

程

給いて日蓮をたすけ給うか。伊東とかわなのみちのほどは

近

そうら

こころ

遠

のち

文

進

ちかく候えども、心はおし。後のためにふみをまいら

そうろう

ひと

語

こころえ

たま

ひと知

せ候ぞ。人にかたらずして心得させ給え。すこしも人しる

おん

悪

胸

内

置

語

ならば、御ためあしかりぬべし。むねのうちにおきて、かた

たも

り給うことなかれ。あなかしこ、あなかしこ。

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經。

こうちようがんねんろくがつにじゅうしちにち

弘長元年六月二十七日

にちれん

日蓮

かおう

花押

ふねもりやさぶろうどののもと

つか

船守弥三郎殿許へこれを遣わす。